

最近の研究倫理の動向 (S47)

今日の公的研究機関における研究のあり方には、これまでも増して研究倫理の順守が求められている。このシンポジウムでは、取り扱うべき研究倫理の主要なテーマとして、ヒトを用いた実験、動物実験、利益相反、論文発表、各研究機関での研究倫理支援をあげ、それぞれの領域の第一線にいる方々をシンポジストに招き、最新の動向の紹介と討論を行った。以下に要約を述べる。

福土珠美氏 2002年に脳神経倫理の成立を宣言する会議が米国で開催されてから10年余りになるが、主にヒトを対象とした脳神経科学研究の倫理的諸課題について、様々な議論が続いている。ヒトの精神活動、認知機能の解明の技術開発には目覚ましいものがあるが、こうした研究方法が被験者の心身の健康への悪影響を与えないために、また、実験成果としての個人情報悪用の防ぎのために、より一層の配慮が求められる。一方、研究成果の公表、社会への説明責任という観点からは、意図的なオリジナルデータの改変が容易になっていること、科学的根拠に乏しい私見をマスメディアやインターネットなど査読手続きを経ない媒体によって公表する機会が増えたことで、脳機能に関する誤った解釈が広まる懸念も高い。これらが我が国の脳神経科学コミュニティが取り組むべき倫理的課題である。

蔵田 潔 動物の愛護に関する法律の改正に関する法案が昨年可決成立した。今回の改正にあたっては、動物実験を行う研究機関の届出制と、実験動物を取り扱う業者の届出制が論議されたが、それらの規制強化は盛り込まれなかった。しかし、動愛法の改正は再度行われる予定であり、今回の議論が再燃する可能性は大いにある。それまで、現在全国で進行しつつある各研究機関相互の査察や第三者機関による評価により、各研究機関での動物実験が適正に行われているかを審査する機関規制を深化させていくことが必要であろう。各研究機関や学術団体が、情報公開や実験動物の必要性や成果に関する社会への積極的なアピールを通じて、一般市民への動物実験への一層の理解を深めるような活動を継続していく必要がある。

研究倫理に求められるもうひとつの重要なポイントは利益相反の問題である。産学連携による医学研究に携わる者にとっては、研究が適切に行われていることを公的に表明する必要がある。医学研究の公正・公平さの維持、学会発表での透明性、かつ社会的信頼性を保持しつつ産学連携による医学研究の適正な推進を図るために、日本生理学会においても利益相反指針を策定したところである。

入来篤史氏 世界の学術情報出版は、発信する論文の質と品位の確保に大きな危機感を抱く状況に直面しつつある。それは研究不正として「捏造 (Fabrication)」「歪曲 (Falsification)」「剽窃 (Plagiarism)」のいわゆる FFP と呼ばれる許されざるものと、健全な「責任ある研究行為 (Responsible Conduct of Research, RCR)」の中間に、グレーゾーンである「問題ある研究行為 (Questionable Research Practices, QRP)」が存在しているからである。研究不正の完全な検出や廃絶にはきわめて多大な時間と労力を要する。これまでは、不正が疑われる論文の検出は、その分野の研究に精通した査読者や一般読者からの指摘に委ねられていたが、現在は剽窃検出ソフトウェア等の発達により、多くの学術雑誌では投稿時点でのチェック体制を構築しつつある。研究不正を防止するためには、研究者各人の人間としての倫理観の寛容、科学者としての能力資質の向上、各研究機関における倫理指針や研究運用規約の策定と遵守などの基本的な対策を徹底するとともに、啓発活動など地道な努力を継続してゆくことが肝要である。

田代志門氏 近年、研究倫理支援と呼ばれる活動がいくつかの研究機関や国の大型研究プロジェクトに現れてきた。これは「研究の開始から終了までを通じて対応可能な助言行為」であり、倫理審査の前段階から個々の研究者を倫理面で支援することにより、早い段階からの倫理的問題の解決を実現することにある。ここでは、倫理審査と同意という研究開始「前」の問題のみならず、研究開始「後」に生じる問題が注目されている。これらの中心は「研究成果の還元」をめぐる問題である。これは、そもそも研究の「成果」とは何なのか、またその「成果」は誰のものか、という問いといっても良い。代表的な問題として、個別結果の返却の問題を挙げることができる。伝統的には研究者には個々の研究対象者のデータを各人に返却する義務はないと考えられてき

た。しかし、現在では個人の遺伝子情報など偶発的所見を含む個別の結果について、研究者が研究対象者に返却することを支持する立場が推進されつつある。

本シンポジウム発表について、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

蔵田 潔（オーガナイザー：弘前大学大学院医学研究科）

シンポジウム S47 の各シンポジストの発表要旨は WEB 版をご覧ください（筆頭著者名・講演タイトルは以下のとおりです）。

福士珠美『脳神経倫理の 10 年：脳神経科学コミュニティへの影響とアジアへの展開』 P.18

蔵田 潔『動物実験倫理と利益相反における情報公開の重要性』 P.19

入來篤史『責任ある研究行為と学術情報発信の倫理 —雑誌編集の立場から—』 P.20

田代志門『研究倫理の新たな展開：NIH8 原則と研究倫理コンサルテーション』 P.20